

## 第 7 章 特許情報活用モデル

7-1 特許情報活用モデル



## 第7章 特許情報活用モデル

### 7-1 特許情報活用モデル

本研究では、ヒアリングやアンケート等を通して、現時点における大学研究者の特許情報活用実態を調査し委員会等で検討を重ねてきた。その結果、例えば対象者個人ベースで判断しても、論文情報検索は研究者として必須の行動様式になっているが、調査対象者の約6割が特許文献・情報の調査を全く行ったことがないと答えている。その一方で、一部のベテラン研究者は、意識的あるいは無意識であるかを問わず、既に自分のものとした特許情報地図を前提に研究活動を続けている。また、研究室単位で見ても、毎週、新規特許出願の検討会を行っている研究室や、研究に入る段階で特許情報の検索と解釈を学生に課している先進的な研究室もある。

これら、特許情報活用の目的は、研究分野、研究フェーズ、研究室総人員、研究室に所属する研究者階層のバランス、指導者の研究マネジメント手法、研究内容と対応する産業界の技術動向・等々、多様な要因に対応して決定されるものである。ここでは、本調査研究で浮上した特許情報活用の目的を下図にモデル化している。代表的事例のモデル化にとどまり全てを網羅したものではないが、このモデルを念頭に研究者の特許情報活用促進や大学での人材育成計画を立てることが望ましいと考える。

#### 【特許情報活用モデル】

●大学院入学前学生の導入教育として・・・人材育成の観点も兼ねて  
→→論文と同様に利用。特に、特許情報は形式が一定。

●自己の研究の、産業技術上の「立ち位置を」確認するため。

●研究テーマについて、過去から現在に至る発想法の確認、気づき。

●応用技術、複合系特許分野であれば、研究テーマについて、  
他社特許により研究が隘路に入る事を防止するため。  
他社特許群との相対位置を知り、開発戦略を練るため。  
他社を含めた、特許の空白地帯を探知するため……。

●共同研究先を探索するため。

●大学発ベンチャー立ち上げのアイテムとして。

●純粋な基礎研究でも、参考情報が取得できる場合がある。

●特定研究テーマについて、特許情報から実験をトレースするため。

●他社特許を回避する情報として。

●将来的な技術情報の流れを予測するため。